

何時も、一匹の象が、此店の側を通つては、立ち止まつて見て居ますから、その女が、時々藥物を與へて居りました。

所が、或日のこと、番人の仕打が氣に入らなかつたものか、此象先生甚く荒れ出して、市場を彼方此方と跳び廻はつて、前に來るものは、何んでも乎でも履み瀾つて、暴れました。

皆は大騒ぎをして逃げ出した、彼の女も店を放つて逃げ出しましたが、餘り狼狽で、肝要の子供が店先きに居たのを氣が付かないで、放つて置いて來ました。

所が、象は其處へ來ると、ピタリ止つて、彼の子供を眺めて居ましたが、やがて、鼻で以て、道の側へそつと寄せて通いて通つて行きました。

日露戦争福引四題

題 品 物 答

(一) 明日の號外 マツチ十個 おま、ちとー

(二) 敗餘の露艦 新らしい割箸 何れにはんのものとなる。

(三) 此頃のアレキシーフ色鉛筆 青くなつたり赤くなつたり。

(四) 日露戦争 カメラア ロシアまけ

笑話

ある人が、畑の側を歩いて居つた時帽子を風に畑の中へ吹き飛ばされたので、丁度畑で大根を造つて居つた農夫に向つて

『もしく憚りだが、一寸其帽子を取つて下さらぬか』と言ひますと、農夫は此方を見て

「何だ、はいかりだがとは何のこつた」といつて
中々機嫌が悪い、そこで又其男が

「いや、憚りだが、其帽を」

「又いやがる、はいかりとは何の事つた、忌々し
う」

といつて、今度は鐵もつ手を離して、睨みつけた
『いや、そんなに怒らないだつていゝではありま
せんか、憚りだがといつた丈けで、別に根も葉も
ない事ですもの』

「オヤ、此野郎葉ばかりが高して、今度は、根も
葉もないとぬかしたな」

脊の高さと鐵砲丸

戦争では、鐵砲の玉が敵の後へ落ちるのは、一向
役に立たないで、當らなくても前に落ちる様だと

非常に敵の勇氣をひしぐ事か出来ず、日本の兵
隊は射撃が上手だから、大抵は敵に當るけれども
夫でも當らなかつた所が、日本人は脊か低いから
其丸は皆シューウ〜と敵の足許に落ちるから、
敵は中々進めない、所が露西亞人と來ると、無闇
に脊が高いのだから、何時でも照準が上向いて居
るので、我軍に向つて打つ丸は、皆ポーン〜と
頭の上を通り越して、行つて仕舞ふといふ話し。